法政大学

SDGs+（プラス）推進特設部会

Voluntary University Review

SDGs+レポート

2026

（Vol.6）

法政大学

法政大学は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

SDGs VUR発行に寄せて

2018年に発表した「SDGsへの取り組みに関する総長ステイトメント」は、本学の姿勢を明確に示すものでした。しかし、本学のSDGsへの取り組みは、このステイトメントから始まったものでも、そこにとどまるものでもありません。大学憲章や長期ビジョンHOSEI2030の理念のもと、教育・研究をはじめ、さまざまな分野で幅広い取り組みを積み重ねてきました。

2030年が近づく今、本学としても、これまでの成果を土台に、その先を見据えた次の段階について考え始める時期に来ています。これまで何を積み重ねてきたのかを振り返ると同時に、2030年以降に何を目指していくのかを考えることが、これからますます重要になります。

これはもちろん、本学だけの課題ではありません。国際的にも、SDGsの達成に向けた取り組みを進めながら、その先の持続可能な社会をどのように描いていくのかという議論が始まっています。2024年の国連「未来サミット」で採択された「未来のための協定（Pact for the Future）」や、2027年に予定されているSDGサミットも、2030年を一つの節目として、その先を見据える動きの表れと言えるでしょう。

そのような中で、サステナビリティをさらに先へ進める考え方として、「再生」やリジェネラティブ・リーダーシップ、またウェルビーイングへの関心も広がりつつあります。これらが今後どのような形で定着していくかはまだ分かりませんが、AIをはじめとする急速な技術変化や世界的な不確実性が高まる中で、個人だけでなく、組織や社会全体のウェルビーイングをどのように高め、よりよい状態をつくり出していくのかという問いは、今後ますます重要になっていくように思います。

本報告書は、本学がこれまでSDGsにどのように向き合い、どのような取り組みを積み重ねてきたのかを振り返るものです。これまでの歩みを共有するとともに、2030年、そしてその先を見据えて、本学ならではの次の一歩を考えるきっかけとなることを願っています。

法政大学総長
Diana Khor

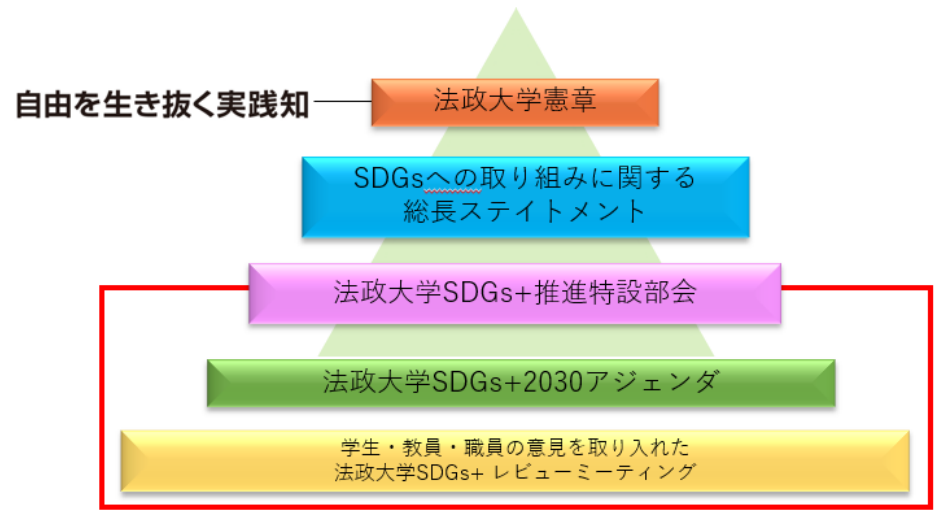


法政大学SDGs+（プラス）推進特設部会
と
法政大学SDGs+2030アジェンダ

法政大学SDGs+推進特設部会とは

法政大学は、1999年に環境憲章制定、ISO14001審査登録などを行って以来、地球環境との調和・共存と人間的豊かさの達成を目指し続けてきました。2016年には法政大学憲章「自由を生き抜く実践知」を制定し、より一層、地球社会の課題解決への貢献および持続可能な社会の未来に貢献することを謳っています。

2018年12月には、法政大学憲章の下、「SDGsへの取り組みについての総長ステイトメント」を発表するとともに、全学的にSDGsを推進し、法政大学ならではの貢献をプラスするという意味を込めたプロジェクト「法政大学SDGs+（プラス）プロジェクト」を設置しました。さらに2023年4月からは、大学全体でSDGs推進により一層取り組むべき課題であるとの考えから、HOSEI2030推進本部の「SDGs+（プラス）推進特設部会」に移行し、「教育」「研究」「社会貢献」「学生」の4つを軸とし、様々なパートナーと連携しながら活動しています。



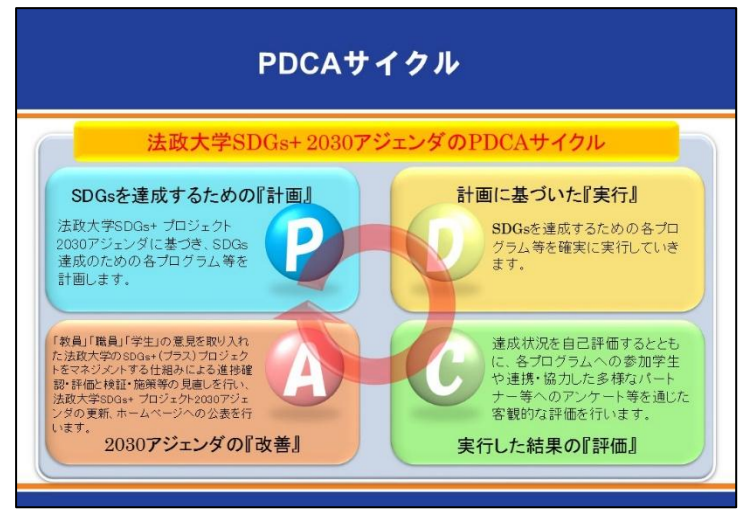
法政大学SDGs+2030アジェンダとは

本推進特設部会では、2020年からSDGsの「行動の10年（Decade of Action）」がスタートしたことを踏まえ、2030年までに達成すべき目標として、「法政大学SDGs+2030アジェンダ（以下アジェンダ）」を策定しています。アジェンダでは、「教育」「研究」「社会貢献」「学生」「パートナーシップ」のゴールを定め、それぞれに、ターゲット、インディケーター、目標値（2030年次）を設定しています。

また、アジェンダの進捗状況を確認し、行動計画の改訂を行うレビューミーティングを毎年実施しています。

このSDGs+レポートでは、ゴールごとの主な活動内容等を報告します。





教育×SDGs EDUCATION for SDGs

4 質の高い教育をみんなに

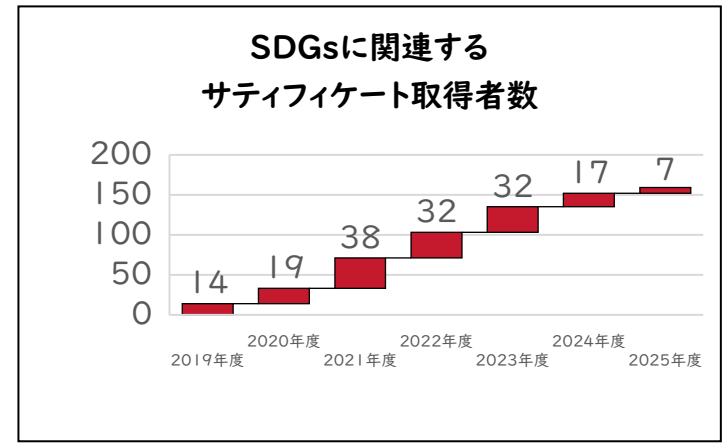
ゴール1
SDGs人材育成のためのあらゆるプログラムを設置し、SDGs人材を世界中に輩出する。

ターゲット		インディケーター		目標値（2030年次）
1.1	すべての学生がSDGsについて理解する。	1.1.1	SDGsに関連するオンデマンドコンテンツの受講者数	累計1万人以上
		1.1.2	SDGsに関連するサティフィケート取得者数	累積2,000人以上
		1.1.3	SDGsに関する正課外教育プログラムの受講者数	累積5,000人以上
1.2	すべての学生が多様なフィールドでSDGsを実践する。	1.2.1	SDGsに関係したフィールドワークプログラムの実施数	累積100以上
		1.2.2	SDGsに関係したフィールドワークの参加人数	累積2,000人以上
1.3	すべての学部等においてSDGsに関連する科目を幅広く開講する。	1.3.1	SDGsに関連する科目数	2030年のSDGs科目群への提供科目数1,000科目以上

SDGsに関連するサティフィケートプログラム

SDGsサティフィケートプログラムとは、本学が独自で制作したSDGs学習用オンデマンドコンテンツ「SDGsオンライン解説動画」を視聴し、全学部から提供されているSDGsに関連した科目で構成されている「SDGs科目群」の中から12単位以上を修得することで修了証（サティフィケート）が授与される制度です。2021年度秋学期より、デジタル証明書である「オープンバッジ」を活用して発行しています。

2025年度にインディケーターの見直しを行い、ダイバーシティやカーボンニュートラル等SDGsに関連するサティフィケート取得者も含めて目標値達成を目指すこととしております。しかしながら2025年度末時点での取得者数は152名となっており、依然として目標値の10%にも届いておらず、取得者数の増加は急務の課題であります。引き続き周知強化だけではなく、取得する意義や活用方法、社会（企業や自治体等）からみたサティフィケートの魅力等を含めた広報戦略の検討等を推進いたします。



STARTプログラム

STARTプログラムとは、SDGsで先進的な取組をしている企業等からゲストスピーカーを招き、講義やフィールドワーク、グループワーク、グループ発表を行うことを通して、SDGsを学び、実際のアクション（行動）に繋げるための思考を学ぶ正課外教育プログラムです。2023年度までは1年間にわたる長期のプログラムとしておりましたが、2024年度以降は、より受講の自由度が高くかつ受講生のニーズに沿った学習の実現を目指し、プログラムの「全必修型」から「フレックス型」への変革を行いました。フィールドワークを必須とする「コアワーク」と必ずしも必要としない「フレキシブルワーク」に分け、それぞれのカテゴリで複数の個別プログラムが集まるようなプラットフォーム型のプログラム構成とし、様々な企業や自治体にご協力をいただき、バリエーション豊かな11のプログラムを実施しました。

本学のみならず連携する大学や高校等、多くの他大学の学生・高校生にも参加いただき、年代や学部・学科の異なる多様な方々が世代を超えてともに学びあいました。2025年度も様々な企業や自治体から講師を招き、各講師企業等の特徴を活かした本プログラムの評価は非常に高く、2026年度以降もこれまでの経験やノウハウを活かしながら、持続的なアップデートを目指してまいります。


プログラム実施の様子


岩手県陸前高田市でのフィールドワーク

STARTプログラム報告記事

STARTプログラム受講学生の声

日頃の大学生活を送る中で、SDGsを耳にする機会が増えたこと、そして新しいことに挑戦したいという思いから、中標津町のプログラムに参加しました。数あるSTARTプログラムの中でこのプログラムを選んだのは、もともと地域への関心があり、さらに現地に滞在しながら課題解決に取り組める点に魅力を感じたからです。

フィールドワークでは、高校生×公共交通という視点から持続可能な地域のあり方を考えました。現地でのヒアリングでは、私たちが事前にたてた仮説と住民の方の意見が大きく異なり、自分たちの視点の偏りに気づかされました。また、町役場の方をはじめ、地域の起業家や地域おこし協力隊の話から、多角的に物事を捉える重要性を学び、学部での学びだけでなく日常生活にも生きる大きな糧となりました。

このプログラムを経験したことで、私は以前にも増して“地域”への関心が深まりました。中標津町での学びをきっかけに、より広い視点で地域課題に向き合いたいと思うようになり、他のSTARTプログラムにも参加し始めました。STARTプログラムは、SDGsへの理解を深めるだけでなく、自分の興味分野をさらに広げられる成長の機会だと感じています。



法政大学
経済学部　国際経済学科
青木　雄大　さん

研究×SDGs

RESEARCH & INNOVATION for SDGs

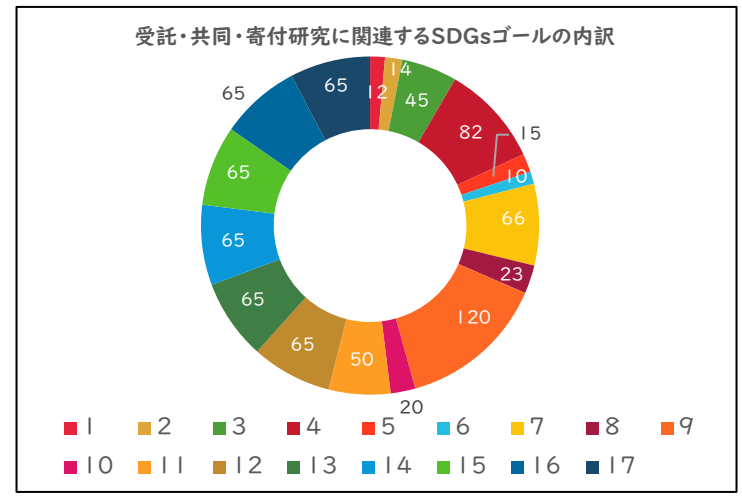
9 産業と技術革新の基盤をつくろう

ゴール2
SDGs達成に貢献する研究を推進し、社会に発信する。

ターゲット		インディケーター		目標値（2030年次）
2.1	SDGs達成に貢献する研究やSDGsに関連する研究を活発に行い、発信する。	2.1.1	SDGs登録プロジェクト数	累積100以上
		2.1.2	SDGsに関連した他機関等との共同研究数	累積300以上
		2.1.3	ホームページや冊子等で発信するSDGsに関する研究数	累積500以上

SDGsに関連した受託・共同・寄付研究数

法政大学SDGs+2030アジェンダでは、SDGsに貢献する研究の促進および発信を活発化させるため、「SDGsに関連した受託・共同・寄付研究数」をインディケーターの一つとして設定しています。これは、本学内のSDGsに関連した研究の一部を把握・整理するとともに、そうした研究を社会に発信していくことを見据えて設定したものです。2024年度より研究開発センターとの連携のもと、共同研究・受託研究・寄付研究などの申請書式に「貢献するSDGsのゴール」の記載欄を設け、当該インディケーターの把握に向けた運用を開始しました。これにより、学内のSDGsに貢献する研究の件数や分野を可視化する仕組みが整備され、今後のさらなる分析や発信の基盤が構築されつつあります。引き続きこのような研究の継続的な把握とともに、学内外への情報発信を一層充実させてまいります。



「カーボンニュートラル推進センター開設記念シンポジウム」の開催

法政大学では、SDGsの推進とともに、カーボンニュートラル社会の実現のため、様々な活動を推進しています。2025年11月には、カーボンニュートラル推進センターの開設を記念したシンポジウム「未来を拓く、「知」と「共創」のカーボンニュートラル ～教育と研究による地域の脱炭素社会への挑戦～」を市ヶ谷キャンパスで開催しました。当日は、ゲストスピーカーによる基調講演・パネルディスカッションのほか、ポスターセッションもあわせて実施し、本学および本学に所属する教員や研究室で行うカーボンニュートラルに資する取り組みや研究を発信しました。

「資源を使い、作り、捨てる」社会から、製品や材料をできるだけ長く活用する社会へ



経営学部
北田 皓嗣 准教授

研究関連の主なSDGs目標

12 つくる責任 つかう責任

私は、会計学を基盤に、サーキュラーエコノミー（循環経済）とサステナブル・マネジメントを研究しています。中心となる問いは、環境に良い活動を企業の一時的な取り組みで終わらせず、日々の意思決定や事業の仕組みにどう組み込むかです。

研究では、製造工程で使われた原材料のうち、どれだけが製品となり、どれだけが廃棄物や損失になったのかを、物量と金額の両面から見える化する「マテリアルフローコスト会計」をはじめ、企業の廃棄物、在庫、コスト、収益性、情報開示などのデータを分析しています。

企業への聞き取りや共同研究も通じて、資源の無駄を減らすことが、環境負荷の低減だけでなく、コスト削減、リスク管理、新しい事業機会につながる条件を明らかにしています。

さらに、研究成果を社会の共通ルールに結びつける活動にも取り組んでいます。国際標準化機構（ISO）の国際エキスパートとして、循環経済の用語・原則を定めるISO 59004、策定中のマネジメントシステム規格ISO 59001、SDGsを組織経営に組み込む国際規格の検討に参加しています。また、企業が資源循環の目標を設定し、成果を測定・開示する国際的な枠組み「Global Circularity Protocol for Business」の策定・発展にも参画しています。研究、企業実践、国際ルールづくりを往復しながら、SDG 12「つくる責任 つかう責任」を中心に、SDGsを理念から具体的な行動へ変えることを目指しています。



社会貢献×SDGs

SOCIAL CONTRIBUTIONS for SDGs

ゴール3

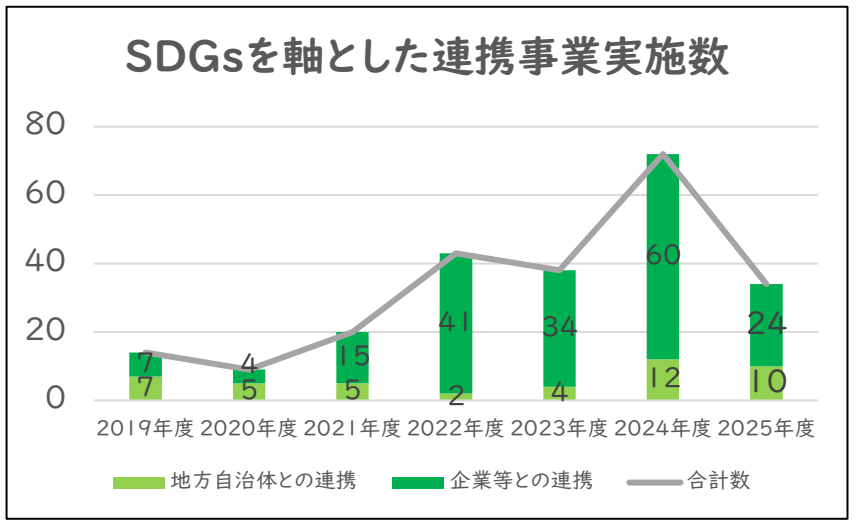
社会との接続を強化し、誰一人取り残さない社会を構築する。

ターゲット		インディケーター		目標値（2030年次）
3.1	SDGsの「leave no one behind（誰一人取り残さない）」の理念に基づき、誰もが無償で受けられるプログラムを提供する。	3.1.1	SDGsに関連する講座、セミナー、シンポジウムの開講数	累積200以上
3.2	SDGsを軸とした高校教育と大学教育の接続プログラムを実施する。	3.2.1	プログラム実施数	累積50以上
3.3	SDGsを軸とした連携事業を活発に実施する。	3.3.1	地方自治体との連携事業実施数	累積100以上
		3.3.2	企業との連携事業実施数	累積100以上

SDGsを軸とした連携事業の概説

法政大学では、社会との接続を強化するため、様々な企業や地方自治体との連携事業を実施しています。企業等との連携事業実施数は、2025年度は2024年度より減少したものの計24回の連携事業を実施することができました。今後も、実施数の維持・拡大に努め、目標値の達成を目指してまいります。

地方自治体との連携事業実施数についても、2024年度に引き続き自治体との連携を創出できたことにより、2024年度と同水準の計10回実施することができました。一方で、目標値には依然として達していない状況です。引き続き、学生に学びの機会を提供できるよう連携の強化を図ってまいります。

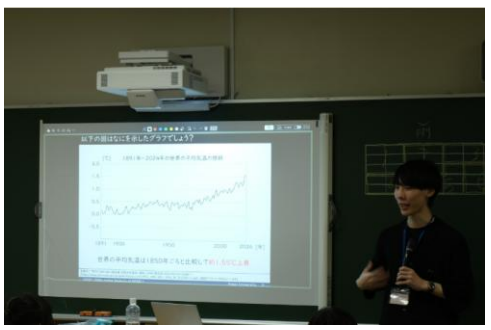


SDGsを軸とした付属校との連携

法政大学では、SDGsを軸とした付属校との連携を行っております。

2025年度は、「学生×SDGs」の一環であるSASHの脱炭素推進チーム活動の一環として、法政大学中学校にて、デザイン工学研究科の中野研究室（旧川久保研究室）が開発した「CN2050 ～脱炭素ボードゲーム～」を用いた「自分たちにできる脱炭素アクション」に関する出前講座を中野研究室と協力しながら実施しました。当日は、中学1年生を対象に、まず気候変動の現状や環境問題に関する世界の動向について基礎的な講義を行った後、グループに分かれ「脱炭素ボードゲーム」を体験しました。グループによっては、2周目・3周目のゲームに挑戦するなど、楽しみながら「自分たちにできる脱炭素アクション」について学ぶ姿が見られました。

アフタートーク企画では、大学生が普段どのようなことを学び、どのような活動に取り組んでいるかを紹介する時間として、研究室やSASHの活動をお伝えしました。今回の講座が、中学生の皆さんにとって「大学って何だろう」を考えるきっかけになっていれば幸いです。今後も付属校と連携した取り組みを進めてまいります。



法政大学中学高等学校における「CN2050 ～脱炭素ボードゲーム～」を用いた出前講座の様子

中学生が「脱炭素アクション」や大学での学びにふれ、これからの展望を持つことができました！

出前授業のはじめに行われた「現在の気候変動の状況や環境問題に対する世界の動向について」のレクチャーでは、より身近な世代である学生の方々の話に生徒が熱心に耳を傾け、問いかけやクイズにも積極的に答える様子が印象的でした。

また、「脱炭素ボードゲーム」の体験では、中学生にはボードゲームそのものが新鮮で、学生の皆さんのサポートも充実していたこともあり、話し合いながら、楽しそうに取り組むことができました。グループによっては、2周目・3周目のゲームに挑戦するなど、「自分たちにできる脱炭素アクション」について積極的に学ぶ姿が見られました。

アフタートーク企画として、大学について対話する時間を設け、研究室やSASHの活動をお話しいただきました。今回の講座は、脱炭素アクションについて学ぶだけではなく、中学生にとっては「大学って何だろう」を考える貴重な機会となりました。付属校ならではの学びの時間を創造することができました。



法政大学中学高等学校　教諭
石川　秀和　氏

学生×SDGs

STUDENTS ENGAGEMENT for SDGs

ゴール4

学生があらゆる場所で活躍できるフィールドを提供する。

ターゲット		インディケーター		目標値(2030年次)
4.1	すべての学生がSDGs達成に貢献する取り組みを実施する。	4.1.1	SDGs Action Students of HOSEI(SASH)登録者数	累積500人以上
		4.1.2	認定プロジェクト数(SASHプロジェクト)	累積100以上
4.2	世界中の学生とSDGsをテーマにした交流を実施する。	4.2.1	海外学生との交流プログラムの参加人数	累積4,000人以上
		4.2.2	海外学生との交流プログラム実施回数	累積400回以上
4.3	学生がSDGs達成に貢献する活動やSDGsに関連する活動内容を発信する。	4.3.1	コンテストやポスター展示会などのプログラム実施回数	累積20以上

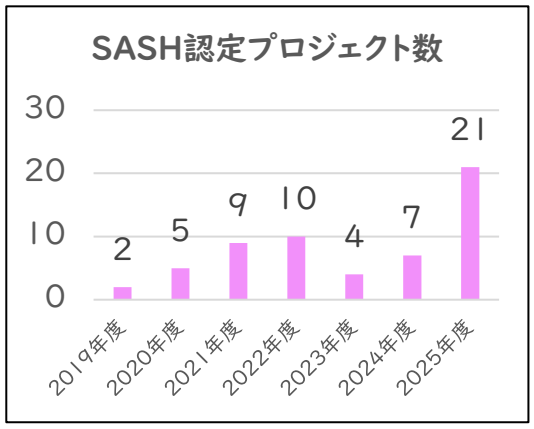
SDGsに貢献する活動を行う学生団体「SASH」

SASH(サッシュ/SDGs Action Students of HOSEI)は2019年に発足したSDGsへ貢献する活動を積極的に行う学生組織で、2025年度末までに139人の学生が登録しています。これまでに合計58回の認定プロジェクトを実施し、参加学生たちの興味関心に合わせたプロジェクトが活発に行われてきました。そのうちの1プロジェクトについて、本ページ下部にてご紹介していますので、ぜひご覧ください。 また、2025年度は、関西大学・中央大学・福岡大学に所属し、同じくSDGs貢献のために活動する学生たちと、夏休み期間に合同SDGs学習プログラムを実施しました。プログラムでは、4大学混成チームにて実際の大阪・関西万博を視察したり、法政大学及び関西大学のSDGsパートナー企業協力のもと、SDGsに関する社会での様々な取り組みを学び、SDGsへの理解を深めるとともに、企業が提示した様々な課題に対して4大学の混合グループにてディスカッションを行い、最終日には課題解決に向けたプレゼンテーションを行いました。SDGs達成に向けた新たなアクション創出のきっかけになったとともに、他大学の同じ目標に向かって活動する学生との交流もできる貴重な機会となりました。

合同SDGs学習プログラム詳細



合同SDGs学習プログラム
ワークショップの様子



KANDAI×HOSEI SDGsアクションプランコンテスト

法政大学と関西大学は、SDGsを軸とした様々な連携事業を共同で実施しています。その一環として、2020年度より「KANDAI×HOSEI SDGsアクションプランコンテスト−持続可能な未来のために私たちができること−」を共催しています。本コンテストは、学生自らが大学での学びの中で持続可能な社会の姿について主体的に考え、SDGsの達成に向けての具体的な提案を行うものに対して顕彰し、学生によるSDGsのためのアクションの創出の促進を目的に実施しています。2025年度は、両大学合計21件のエントリーのうち、10チームが本審査へ出場し、多種多様なアクションプランが発表されました。



KANDAI×HOSEI
SDGsアクション
プランコンテストの様子

アクションプラン
コンテスト詳細

SASHの活動 ～『古着のアップサイクルプロジェクト』～

SASH(サッシュ:SDGs Action Students of HOSEI)は、チームに分かれてSDGsに関する様々な取り組みを行っている大学公認の学生組織です。現在50名以上の学生がキャンパスや学年の垣根を越えて活動しています。そのSASHの中で私が加入しているのがFASHION TEAMです。 FASHION TEAMは、学内で回収した古着を無償で譲渡する活動を行っています。

これまでの累計譲渡数は600枚を超えました。「ワクワクする未来を創造する」というSASH全体のモットーのもと、私たちは「参加しているうちに、気づいたら環境にやさしいことをしていた」という理念を大切にしながら日々活動しています。

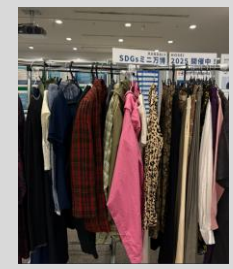
これまでは譲渡会の運営で精一杯でしたが、新メンバーも加わり、チーム全体で協力し合うことで、他大学を巻き込んだイベントへの参加(朝日新聞社主催)や、Instagram(@SASH_FASHION)での発信強化など、新しい挑戦ができるようになりました。

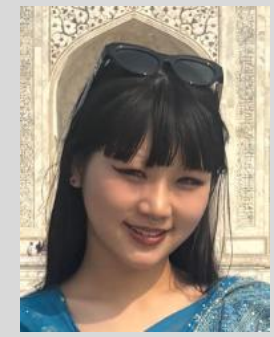
市ヶ谷キャンパス以外の法政大学生や高校生、そして「環境問題に興味はあるけれど、どう行動すればいいかわからない」という人たちに向けた発信・啓発にも力を入れており、実際に他キャンパスから参加してくれる学生も出てきています。投稿を通じて活動を知り、足を運んでくれる人が増えていることが、何より嬉しい変化です。

また、古着のアップサイクルにも取り組み、捨てられてしまうはずだった服にリメイクを施すことで、新たな価値を生み出す活動も行っています。企業とのコラボレーションでは、リサイクル素材の合皮を使用したパソコンケースの販売やワークショップも実施し、ファッションを入り口に環境について考えるきっかけを届けることができました。

最初は小さな取り組みだった譲渡会も、今では多くの人を巻き込む活動へと成長しています。これからも、環境にやさしい選択が「特別なこと」ではなく自然と日常に溶け込んでいくような未来を目指して、FASHION TEAMとして発信を続けていきたいです。







法政大学
法学部
国際政治学科
舩橋　さくら　さん

パートナーシップ×SDGs　PARTNERSHIP for SDGs

17 パートナーシップで目標を達成しよう

ゴール5
あらゆる課題に対して、パートナーシップで目標を達成する体制を構築する。

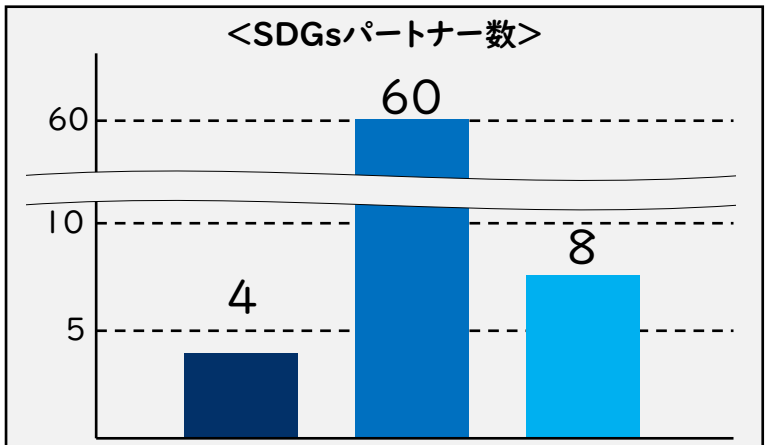
ターゲット		インディケーター		目標値(2030年次)
5.1	地方自治体や企業、大学など様々なパートナーとの協力体制を構築する。	5.1.1	地方自治体のパートナー数	10以上
		5.1.2	企業のパートナー数	60以上
		5.1.3	大学など教育機関のパートナー数	10以上
5.2	様々なパートナーとコミュニケーションを図り、新しい価値を創造する。	5.2.1	SDGsパートナーズ交流会等の開催数	累積10回以上

「法政大学SDGsパートナーズ」加盟団体との連携

SDGsパートナーズに加盟する地方自治体・企業・教育機関等の数については、2030年までの目標値を十分に達成できる状況となっています。特に企業パートナーについては、目標数である60に到達しました。2025年度も、STARTプログラムにおいて多様な連携企業や自治体等を講師に招き、パートナーとの連携プログラムとして計11個のプログラムを実施するなど、実質的な連携を進めることができました。

2026年度以降も、企業パートナー数の現状維持に加え、地方自治体・教育機関のパートナー数拡大を目指し、実質的な連携を重視したパートナーシップの推進を図ってまいります。

連携プログラムの実施報告



法政大学SDGsパートナーズ交流会の開催

法政大学SDGsパートナーズでは、学生の活動発表の場の提供や、本学とパートナーとの連携事業の促進、さらには学生とパートナー、またパートナー同士の交流などを目的に、年に2回交流会を開催しています。2025年度の第1回交流会では「『SDGsミニ万博』を盛り上げる企画・仕掛けを考えよう!」をテーマにワークショップを実施したり、第2回交流会では人間環境学部金藤ゼミによる「産官学連携で描く“持続可能な社会のためのビジネスモデル”」をテーマにしたワークショップやSDGsの達成に向けて日々研究・活動をしているゼミや学生団体によるポスターセッションを行ったりするなど、パートナー様同士はもちろんのこと、パートナー様と学生が交流を深められる企画を多く実施しました。参加者からは「大学・学生・企業・地域がつながり合い、学び合うことの可能性を強く感じた。」、「学生やパートナー企業の方と活発に意見交換ができて有意義な時間だった」など、多くの感想が寄せられました。 2026年度以降も、プログラムの連携のみにとどまらず、このような交流の機会の創出も積極的に行い、パートナーシップとしての連携を強化してまいります。

2025年度 第1回交流会

2025年度 第2回交流会


ワークショップの様子


ポスターセッションの様子

法政大学SDGsパートナーの声

リコージャパンは、お客様への価値提供を通じて社会課題の解決に取り組み、脱炭素社会および循環型社会の実現を目指しています。

その活動の一環として、法政大学SDGsパートナーズに参画し、2025年度はリコー環境事業開発センター見学ツアーを実施しました。

学生の皆様には、リユース・リサイクルの実践や環境経営の取り組みを実際の現場で体感いただき、企業がどのようにSDGsやカーボンニュートラルに向き合っているのかを学んでいただきました。

フィールドワークやグループワークでは、学生ならではの柔軟で新鮮な発想に触れ、私たちにとっても多くの気づきと学びを得る機会となりました。

また、その成果を法政大学SDGsパートナーズ交流会で共有し、企業・教職員・学生の皆様と対話を深めることができました。

今後も法政大学様との共創を通じて、次世代を担う人材育成と持続可能な社会づくりに貢献してまいります。



リコージャパン株式会社
濱口 七海 氏

SDGs+推進特設部会の取組みに対する第三者意見

あすの資源を考えるコンソーシアム　眞崎　恒次　氏



「あすの資源を考えるコンソーシアム（ASK）」は、使用済みPETボトルをはじめとした廃棄物由来の資源物の回収から中間処理、再生樹脂製造、再商品化まで、資源循環の動脈・静脈の両方を担う企業で構成された団体です。

法政大学SDGsパートナーズへの加盟を機に実現した講演会「Re:Think!PETボトル ― 資源を『ゴミ』にしない社会へ」では、回収・中間処理（首都圏環境美化センター）、再生樹脂（進栄化成）、キャップリサイクル（スーパーメイト）、そしてボトルtoボトルの業界的取組と、サプライチェーンの各担い手が順に登壇しました。第2部の対話セッションでは学生が関心のあるグループに自ら飛び込み、「なぜ分別が必要か」「再生品はどこへ行くのか」という問いが飛び交いました。

動静脈それぞれに生きてきた私たちが一堂に会し、学生の純粋な疑問に向き合う時間は、業界の枠を超えて資源循環を問い直す場となりました。法政大学との連携は、次世代とともに「資源の未来」を描く、私たちにとっても得難い機会です。



講演会・
対話セッションの様子



施設見学の様子

SDGs+レポート総括

ー法政大学SDGs+レビューミーティングにおける教職員・学生との振り返りを経てー

レビューミーティングでの議論を踏まえ、今年度のSDGs関連の取り組みをあらためて振り返ります。まず「教育 × SDGs」では、オンライン講座の受講者数やサティフィケート取得者数は思うように伸びませんでしたが、正課外教育プログラムやフィールドワークプログラムには、例年どおり多くの学生が参加してくれました。特に、STARTプログラムを受講者のニーズに合わせてフレックス型へと見直したことは、参加者にとって良い変化として受け止められたように感じています。次に「学生 × SDGs」では、SASH登録者数の増加はやや落ち着いてきたものの、各種プログラムの開催回数や参加者数は増えており、他大学との共同イベントなど、学生が主体となる活動がより活発になってきています。また「研究 × SDGs」については、登録プロジェクト数自体は大きく増えていませんが、SDGsに関連する研究は年々着実に増えており、研究面での広がりを感じられる一年となりました。

こうした3つのアジェンダの状況から、SDGsに関心を持つ学生や教職員の活動は、少しずつ形を変えながら深まり、活発さを増していることがうかがえます。2030年の目標に向けて、確かな前進が積み重ねられていると言えるでしょう。一方で、新たに活動に加わる学生や教職員の増加率は、アジェンダ策定当初と比べるとやや緩やかになっているようにも見えます。これが単なる関心の低下によるものなのか、それとも本推進特設部会が把握しきれていない活動があるためなのか、現時点では判断が難しいところです。ただ、STARTプログラムやSASH古着プロジェクトの成果を見ると、SDGsを身近に感じられる機会や、参加のきっかけとなるインセンティブが求められているのではないかとも感じられます。

SDGsの達成期限である2030年まで残りわずかとなり、本推進特設部会としては、これまでの取り組みを進めつつ、ポストSDGsを見据えた議論も本格化させる時期に入っています。関西大学との共同事業であるKANDAIxHOSEI SDGsアクションプランコンテスト、脱炭素をテーマにした付属校での出前授業、さらには「パートナーシップ × SDGs」における自治体や企業との交流会など、さまざまなステークホルダーとの対話を通じて参加の輪を広げていくことが、今後の大切なポイントになっていくように思います。



生命科学部
杉山　賢次　教授
法政大学SDGs+推進特設部会座長

私立大学化学系教員連絡協議会（私化連）理事・副会長を歴任し、化学分野を中心に教育・研究活動に従事している。高分子化学者としてSDGsに貢献すべく、生分解性プラスチックの構造を分子レベルから設計・合成し、クリーンな光反応を利用することで、生分解性と機能性の両立を目指した新しい材料の開発に取り組んでいる。



Voluntary University Review
「SDGs+レポート2026（Vol.6）」

発行：法政大学SDGs+推進特設部会
2026年9月30日発行